

王立オーストラリア・ニュージーランド精神医学会総会に参加して

福井 英理子^{1,2)}, 青木 宣篤^{3~5)}

索引用語 国際学会, 多文化間精神医学

この度, 2023 年 5 月 28 日から 6 月 1 日まで, The Royal Australian and New Zealand College of Psychiatrists (RANZCP) 年次総会に日本精神神経学会代表派遣者として参加する貴重な機会を頂戴した. 7,936 名の会員を有する RANZCP と日本精神神経学会は長年連携しており, お互いの年次総会に代表者を派遣して最新の精神医学に関する情報交換や人的交流を行っている.

本大会の開催地であるパースは西海岸に位置するオーストラリア第 4 の都市で, 地中海性気候に属し, 年間を通して穏やかな気候と人々のあたたかさで知られている.

初日は西オーストラリア州立美術館にてウェルカムレセプションに参加し, 会長である Lakra, V. 先生, Moore, E. 先生をはじめご参加の先生方と交流をもった. 世界中の先生が一堂に会し歓談する機会を体験することができ, 圧倒されるとともに大変刺激を受けた. 本大会には, 会場に 1,800 名, オンラインで 450 名の参加があったという.

翌日からは基調講演やシンポジウムを聴講した. 国民の 25% 以上が海外で出生し, 63 の言語が使用され, 45% の医療スタッフが海外で資格を取得しているという multi-culture の根付いたオーストラリアならではの多彩な発表が展開され, カナダやイギリスから招待された先生の基調講演では, 各国における移民や先住民族の現状, 異文化適応, メンタルヘルスに関する取り組みを学んだ. 先住民族のメンタルヘルスについて, 「Cultural Safety」というキーワードを多く耳にした. 講演を通して, Cultural Safety とは特定の文化の固有の権利, 文化的アイデンティティ, 伝

統を認識し, 保護し, 継続的に向上させることを指し, 医療従事者自身の文化観念が提供するサービスに潜在的に影響していること, 自身の偏見, 態度, 仮定, 固定観念を認め, 批判的意識をもって, 内省, 自己認識を続け対処することで, サービスを享受する者が「文化的に安全」と判断できるよう努めることが求められる, と考えられていた. この概念は多文化間精神医療において重要な文脈であり, 外国人が暮らしやすい地域づくりの根幹にもなるであろう.

31 日には Joint JSPN/RANZCP symposium : transcultural mental health - lessons from Australia, New Zealand and Japan にて, (i) 日本の精神科医療の現状や特徴, オーストラリアとの比較について, (ii) 若年日系ブラジル人のメンタルヘルスと民族アイデンティティの関連, そしてオーストラリアの headspace に発想を得たワンストップ相談センター SODA (Support with One-stop care on Demand for Adolescents and young adults) の取り組みについて発表した. headspace は精神疾患の有無にかかわらずすべての若年者を対象とする包括的相談窓口で, オーストラリア政府の支援を受けて全土に 150 ヲ所が設置されている. 他にも, 東邦大学医療センター佐倉病院・桂川修一先生が発表された在留外国人の数の推移やメンタルヘルスの課題, RANZCP の先生方が発表された, 移民の精神障害に対するスティグマや, 移住のプロセスを経たアイデンティティの希薄化, 文化的疎外感など, 医学的根拠と経験に基づいた知見を学ぶことができた. ディスカッションでは, 医療現場における多様な背景をもつスタッフとのかかわりについてなど, 実臨床で直面する課題について議論が展開された. 大変示唆に富む内容で, 本会のテーマである「NEW HORIZONS CONNECTED FUTURE」の通り, 外国人の受入れが進む日本において今後の精神医学の発展を支えるシンポジウムであると感じた. 同日の州立博物館でのガラディナーにも参加させていただき, 学会期間を通して RANZCP の先生方や現地パースの方々のあたたかさに

著者所属: 1) 東邦大学医学部精神神経医学講座 2) 医療法人正永会港北病院 3) 関西医科大学精神神経科学講座 4) ニューサウスウェールズ大学精神医学部 5) ブラックドック研究所

受理日: 2023 年 9 月 13 日

doi: 10.57369/pnj.24-009

ふれ、とても有意義な時間を過ごした。

パースはシドニーやメルボルンと比べると在住日本人が少なく、短い滞在のなかでもマイノリティとして生活することの困難さや葛藤、一方で非日常への高揚感も体験することができ、多文化間精神医学の権威である桂川先生に民族的マイノリティのメンタルヘルスウェルビーイングについてもご教授をいただき、視野を広げることができた代えがたい経験となった。この経験を活かし、外国人の精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの実装に向けて、多

文化間精神医療の発展に寄与できるよう精進したい、と決意を新たにした。最後に、このような光栄な機会をいただき、RANZCPの先生方をはじめ日本精神神経学会の先生方、および関西医科大学精神神経科学講座、東邦大学医学部精神神経医学講座、港北病院の先生方に心より御礼申し上げます。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。